

No. 899

子供を守ろう

—交通安全運動—

広場のない東京の子供達。路地だけが子供達の天国だ。しかし、増えつづける車は狭い路地にも遠慮なくしてくる。

新学期、子供の交通事故がにわかに増加するという。四月五日から、交通事故から子供を守ることを重点にした交通安全運動が始った。

世田谷交通安全協会では、カメラ・パトロール隊をくり出した。学童にたいし危険な運転をする車を撮影し、悪質なものは警察に告発すると、行きかう車に目を光らせている。

警視庁では、都内五カ所でスノール・スクランブルをもうけた。歩行者が斜めでもまっすぐでも、自由に横断できるこのシステムを、通学児童保護のため、増設する予定だという。

昨年一年間都内で、1,470人の児童が負傷し19人が幼い命を車に奪われた。これ以上子供の交通事故を増してはならない。

ある医師の半生

引舟にひかれたダルマ船が行きかう隅田川に通じる京浜運河の働きの場所、生活の場とする水上生活者。この人達の健康を支えてきた一人の老医師がいる。竹内先生64才。「酔どれ天使」のモデルとなった人でもある。

23年余り、週2回欠かさず五トンあまりの小さな舟で巡回してきた。昭和23年、この頃品川や向島周辺の運河で暮らす水上生活者は8,000人近くいた。居住するダルマ船の中の部屋はシラミや南京虫の巢で、最低生活環境だったという。ハシケからハシケへ、黙々と巡回診療を続けた。その報酬は月750円。今でも2万円程だという。しかし医学の使命は金でかたづけられないですからねとくたくたなく笑う。一時水上病院を作る夢もっていた。この事を聞いた東北地方の中学生が送ってくれた千羽鶴。一回の診療が終るたびにこの真心こもった鶴を運河に流してきた。その夢はかなう事はなかった。

折りしも四年に一回開かれる第18回医学総会は数々の批判を受けながらも開かれた。反医学総会も医療を告発する集会を開いていた。医学は誰れのものか。地道に行動で示してきた竹内医師。

64才という年にかてなかった。

「水上居住者が最後の一人になるまが巡回診療を続けたかったのですが……」

水上居住者たちが送ってくれた花束をかかえる竹内医師。その胸に去来するものは何であったろうか。

一人の老医師の半生は、水上生活者の健康と共にあったといっても過言ではない。